GPPN 学生会議

Crisis as Opportunities:

What Policies Do We Need for Sustainable Development Today?

報告書

大曲　由起子

東京大学公共政策大学院　国際公共政策コース 2 年

公共政策大学院からの参加者：

大曲由起子　吉田直広　松下佳世　笹田拓志　伊藤夢人　稲田紗和子

吉田泰輔　吉田充　国川雨那　Leng Vandy　上野豊　吉田高　川瀬翔平

「いつか沢山の東大のクラスメートと共にこの場でアクティヴに会議に参加できたら」それが、ちょうど 1 年前にパリ政治学院で開かれた 2008 年 GPPN 学生会議に参加させていただいた東大からの少数の参加者の一人になっての正直な、しかし理想的・野心的な感想だった。2009 年、シンガポール国立大学リー・クァンユー公共政策大学院（LKY）で開かれた GPPN 学生会議では、私の期待を上回る成果を上げることができた。自分は GraSPP の仲間たちと共に、世界中の公共政策を学ぶ学生から最大限のものを学び、そして我々も、我々の持つ最大限の貢献を彼らにすることが出来た。そしてそこから GPPN-グローバルな公共政策のネットワークーを張ることができたのである。学び取りの過程は、まず我々の先を行くグローバル・リーダーのスピーチで始まった。LKY 院長である Prof.Kishore Mahbubani は、”Breaking out from the narrow bound”と題し、世界の主要アクターの構成を変革し、それぞれの政府が自己の国のみならず世界規模の課題解決に向けて全体の舵を取ろうとすることが大事で、そのためにはこれまでの既存の殻を破り、”think out of the box”が我々に今求められていると語った。

次に ASEAN の事務局長である Dr.Surin Pitsuwan は、”Leadership, old institution, reforming the old institution, global citizenship”について話し、新しいリーダーシップが古い組織・構造を変革することが必要であること、そのリーダーシップの新たなコンセプトは、エリートが担うものではなく、それとは逆に、私たち一人ひとりがもつ”passionate intensity”がこれからの世界には必要であることを我々に力強く語りかけた。

その他、APEC がシンガポールで開催中という好条件の中、学生との対話のため、Luis Alberto Moreno（米州開発銀行総裁）黒田東彦総裁(アジア開発銀行総裁)がそれぞれ駆けつけ、本会議の議題－危機を機会と捕らえる－視点から、どのように各組織が問題解決に取り組んでいるのかを講演・対話の中で共有した。また、パリやニューヨーク、ロンドンをつないでのビデオ会議も開かれ、”The Economic Crisis: Opportunities for Developing Countries”と題し、IMF やアジア開発銀行といった国際金融機関での勤務経験のある LKY の Dr.Charles Adams,GraSPP の中林伸一先生が金融の面から途上国がどのように危機を機会

に変えていくのかについて、ビデオの向こうの学生と議論した。 最終日のパネルはシンガポールの Ministry of Environment and Water Resources の Mr.Tan Yong Soon 氏を迎えて同国の環境政策について講演・議論をした。私は Tan 氏に対して、日本政府とシンガポール政府が対立していた、CO2 排出量に責任を持つ「先進国」とはどの国を指すのかにつき質問した。直接シンガポール政府関係者に立場をうかがうことができたことは興味深かった。

しかし何よりも 2 日間の会議で中心だったのは、学生による発表と質疑応答だった。世界中の優秀な学生たちが一斉に会し、知識や経験を共有し、共に今回の会議の課題―危機を機会にすればどうすればよいのかーについて討議することは刺激的であった。私はまず”Aid Governance”の分科会に参加した。私の東京でのクラスメート、2 グループがそこで発表したが、他大学の学生と共に発表し、彼らと意見交換をする友人を見る事は新鮮であり、まさに我々が会議に貢献しているということを実感できた瞬間だった。この分科会では、4 つの発表の後、異なるトピックについて研究をしたこれら発表者が前に出て、全体のトピックの大きな枠内で、「では、どうすればよいのか」を、そこにいる学生みんなで考えた。全く異なるバックラウンドを持った学生が互いにアイディアを出し合うことは非常に興味深いものだった。例えば、LSE の学生が英国の ODA の特徴について話すと、JICA の現場を視察したことのある分科会発表者であった川瀬翔平さんが、違った視点の援助を指摘した。稲田紗和子さんの中国のアフリカ援助に関する発表は、参加者の中の中国人学生の議論を炊きつけ、同じく発表者であった、アフリカ開発銀行についての発表をしたパリ政治学院の学生は、同銀行側からの見方を提示した。このような専門分野の横断的・インターアクティブな対話はその後の分科会でも同じように起こった。

続く”Millennium Development Goal” の分科会では、上野豊さん、小寺信也さんと共に私もプレゼンター側となった。中林先生の前学期の事例研究で共に華井和代さんを含めた 4 人での共同研究、「Required Conditions for The Successful Agricultural Development in Africa」を、華井さんのケニア現地調査も含めて発表した。発表後は沢山の質問の手が上がり、中には予想もしていなかったような質問も飛び交い、答えるのは難しかったが同時に興味深かった。私は、質問者の視点、質問の内容をきちんと理解し、そして質問者が知りたいことをきちんと答えられる、そしてコメントに間違いのないコメントを返す、その難しさを実感した。我々の農業開発に関する議題につき、コロンビア大学の Earth Institute で研究をする学生から、遺伝子組み換え作物は使えないのかとの質問に、その場限りのような受け答えしかできなかったのが残念であった。（しかし、その後に質問者とまた議論する機会があったのも、ネットワーク重視のこの会議ならではで

あった）一方で、先進国の農家への補助金についての質問にはきちんと答えられたこと、また、時間配分の点ではよくできた。自分たちの発表の後、GraSPP の学生はもちろん、他の大学の学生も「洗練されたとても興味深い発表だった」と、歩み寄ってきてくれたことが大変嬉しかった。（スイスのジュネーヴ・高等国際問題研究所－HEI からの学生で、その後彼がスロベニアの内務省で私と同じ専門分野－移民、人権―に関わっていたことがわかり、話が弾んだ。）発表者同士の結束が強まったことも、互いの友情の維持につながることだろう。発表後は思ったより心身共に疲労を感じたが、「この会議に貢献ができた」と思うと、疲れも吹き飛んだ。

最後は”Energy”を議題とする分科会と、”Sustainable Cities”の分科会に出席した。前者に参加した正直な理由は、リハーサルを共にした吉田泰輔さん、吉田充さんらの発表を改めて聞き、他大学の学生がどのような反応を示すかに興味があったからでもあった。予想以上に他大学からの学生からの興味を大いに引きつけ、「この数字はどうして出るのか」「核施設の危険性は考慮されていないのか」等、鋭い質問でありつつも、皆の頭の中には、「ではどうすれば有効な公共政策が形成されるのか」という共通の視点があった。そのため結局は吉田さんらの発表を基盤として、皆で「どうすれば良いのか」について頭を悩ませ、今後の研究課題を共に考えていたのが面白い。LKY 在籍のドイツからの学生が社会コストの数値化について質問をすると、参加席にいた吉田高さんが答えるシーンもあった。答えが分科会で出るわけではなくとも、異なるバックグラウンドを持つ学生が、他の大学の学生の優秀な発表に刺激され、それに挑戦しようとし、そして共に答えを出そうとする、そのプロセスがとても有意義であった。前学期から吉田さんらの発表を何回も見てきたが、GPPN での発表を見て、その上達振りが顕著だった。このような、努力に裏づけされたより良い発表が、議論を呼んだとも言える。

“Sustainable Cities”では、ニューヨーク市で都市開発に関わった経験を持つコロンビア大学の学生が、”[Public] policy works to change people’s behavior. We just need to implement it!”と強調し、公共政策が持つ社会へ及ぼすポジティブな影響を改めて確信し、「現状を改善する」という理想をどの学生も持っていると、より高いモチベーションを声高に表現する学生から、皆が喚起されるシーンもあった。

会議を通して私は、興味深い発表をした学生には全て個人的に話しかけ、彼らの発表を褒め、意見を交換した。その他、「君の質問には共感した」と、自身の投げかけた質問に関してフィードバックしてくれた学生もいれば、分科会後残って共に議論を続けることもあった。また他大学の学生が、「東大の学生の発表は素晴らしいものだったね」と感慨深く言ってくれた時は実に心が躍った。

すべての分科会終了後には、LKY から東大への留学生 John Mannion さんや松下佳世さんも含めた各分科会の書記者・モデレーターが、全体にどのような議論がなされたのか共有し、振り返る時間があった。さまざまな専門的知見から共通テーマである「危機を機会へ」導くことのできる公共政策とは何かをそれぞれが考えられる時間であった。

会議の主催者の一人であったドイツ人の LKY 学生、マーティンさんの総括には共感するものがあった。彼はこの会議を終えて確認できたこととして、1)Challenges we face are complex and interrelated. This is why cross-sector analysis is needed. 2) A field of public policy is important because we can get benefits from other disciplines 3) Looking for solutions together means a lot. 私は特に 3 点目をここであえて強調したい。それは、今回の GPPN 学生会議に参加してならではの発見だったからである。私は心の中で、”a process of identifying problems, coming up with solutions together, and building public policies with people from different backgrounds are important.”と彼の言葉を復唱し直していた。最後に我々参加者にエールを送ってくれた LKY の Dr.Eduraeo Araral はこの思いを後押ししてくれるものだった。その趣旨は、In this conference, you must have leaned how difficult it is to make collective decisions. But we can come up with effective decisions if we have people who really want to make change というものだった。我々国境を越えて集まった学生が「公共政策」へのコミットメントの下にひとつになった瞬間だった。

このような学生同士の、空間を共有する物理的な交流はもちろん、精神的なインターアクションが、我々学生同士のネットワーク作りに貢献したことはもちろんである。沢山刷っていったはずの私の名刺はほぼ完売し、代わりに新たな友人たちとの思い出が山積みとなった。アメリカやヨーロッパからの学生のほか、同じアジアのミャンマー、中国、ネパール、インド、そしてアフリカのルワンダなど、「公共政策」を専門とする学生らとずっとコンタクトを取っていくという生涯の宿題ができたことが何よりの喜びである。

最後に主催者側の会議へのコミットメントには心を動かされた。特に責任者であった Azul さんは、会議の数ヶ月前から細かなコンタクトをとり、また丁寧なアドバイスも頂いた。学期末であったにもかかわらず会議に深く貢献してくれた主催者側にはどれほどの礼も十分ではない。また一方で、東大でこのような会議が現段階で開けるかというと、まだそこまで到達していないということを感じた。いつか GPPN 学生会議を開けるような能力とやる気を組織と学生に培うことが GraSPP の今後の長期的課題であろうと思う。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった東京大学公共政策大学院に心から感謝を申し上げたい。また、事務的補助をしてくださった小川琴子さん、那知信恵さん、学業面で最後まで支えてくださった中林伸一先生には重ねて御礼を申し上げたい。　以上